

障害当事者が感じる社会の「まなざし」

－国立身体障害者リハビリテーションセンターの入所生への聞き取りから－

八巻（木村）知香子* 寺島彰** 山崎喜比古***

Societal Attitudes toward Persons with Disabilities

－Qualitative Research on the Experiences of the Residents at
the National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities－

Chikako (KIMURA) YAMAKI*, Akira TERASHIMA**, Yoshihiko YAMAZAKI***

To address the societal attitudes toward persons with disabilities, we interviewed twelve residents at the National Rehabilitation Center for the Persons with Disabilities in order to understand their perspectives on social attitudes toward persons with disabilities and the impact these attitudes have on their daily lives. Societal attitudes were perceived with three central concerns: 1) limited opportunities to lead independent lives, 2) peer-group discrimination, 3) exclusion and disdain in public places. These pressures are perceived as both tangible discrimination and intangible aspects of the social climate and atmosphere which reflects the negative "disability role". The participants' reaction to these negative attitudes were found as 1) feeling of exclusion and isolation and desire to interact with society, 2) acquaintances hesitating to participate socially, 3) positive approach to oneself and the society. Our result showed that the societal attitudes toward the persons with disabilities actually affect the daily lives of the persons with disabilities, so we need further research to investigate the quality and quantity of these attitudes including intangible atmosphere of the society. We also need to document the existence of the active challengers with disabilities.

キーワード：スティグマ、社会的役割、ステレオタイプ

1. 緒言

1.1. 障害者の経験についての市民の理解の必要性

近年になって、国際障害者年（1982年）、障害者の10年（1983～1992年）、アジア太平洋における障害者の10年（1993～2002年）が制定されるなど、「障害者の完全参加と平等」、ノーマライゼーション理

念は広く推進される目標となってきた。しかし、当然のことながら理念を掲げただけでは、障害者を劣位におく社会の価値観が簡単に変化するわけではない。「障害者の完全参加と平等」の理念を体現するためには、社会の成員一人一人が障害をもつ人々を理解し、受け入れる姿勢へと転換される必要がある。

* 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所

** 浦和大学 総合福祉学部

*** 東京大学大学院 医学系研究科

* Research Institute, National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities

** School of Social Welfare, Urawa University

*** Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

大多数の先進諸国において障害をもつ人々は社会の中で隔離・排除され、マージナルな位置に置かれてきた[1]。我が国においても、生活の安寧を保障する目的で推進された施設建設や養護学校の設置が、隔離と排除を強める機能を果たしたことも指摘されている[2]。つまり、隔離・排除されたことにより、障害をもつ人々が、障害をもたない人々にとってますます見慣れない存在となり、相互理解が難しい現状を生んでいると考えられる。逆に言えば、障害をもつ人々の経験を広く一般市民が理解することが、障害者が社会参加をしやすくするための極めて重要な要件の一つといえるだろう。

1. 2. 障害をもつ人々の経験についての欧米の研究の方向と批判

欧米では、1990年前後より、障害をもつ人々の経験に関する研究のレビューが次々と発表され、それらの論調の多くは共通した特徴が見られる。障害をもつ人々に関する過去の研究の動向について批判される論点は主として2点である。一つは、内面化された個人の心理状態を測定することが、結果的に、個人差の問題に焦点をあてることになり、個人への介入の方法を探ることに力点が置かれることになっている点である。もう一つは外部（研究者、健常者）の視点での望ましさが設定されており、本人たちの意識とはかけはなれた目標を押しつけている、または、弱者、悲惨な者、という前提で扱っている点である[3-5]。

だが、繰り返しになるが、上記の批判を示している論者達も、障害をもつ人々が社会の中で隔離・排除され、マージナルな位置に置かれていることは十分に意識しており、また取り除くことが必要であることは強調している。

これらの先行研究が示唆することは、障害をもつ人々が日常的にどのような経験をしており、それぞれについて各人がどのように意味づけているのかを当事者の視点から明らかにする必要があること、従来当然とされてきた依存的な障害者像に囚われることなく、実際のライフの全体像を把握することが必要であることと言える。

しかし、我が国において、地域で生活する「障害者」に関連した実証研究は、多くの場合、サービスニードの把握か、家族の介護負担の問題としてのみ取り上げられてきた。そのため、「市民の理解が必要」であるといった表現が多くの論文に使われているものの、何をどう理解することが求められているのかほとんど不明のままである。よって、障害当事者が社会の中で

のような態度を求めているのかを明らかにすることが必要である。

よって本研究の目的は、1) 障害をもつ当事者がどのような局面で社会の「まなざし」を感じ取っているのか、またそれらの「まなざし」はどのような内容を含んだものとして捉えられているのか、2) それらの「まなざし」に、当事者たちはどのように反応しているのか、を探索的に明らかにすることである。

2. 対象および方法

本調査のインフォーマントは、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所に2002年6月時点で入所していた、肢体不自由者6名、聴覚障害者3名、視覚障害者3名の計12名である。調査の趣旨を同センター更生訓練所指導課に説明し、本調査の意義と方法について賛同を得た上で、指導課担当ケースワーカーよりインフォーマントの紹介を受けた。インフォーマントには、調査の趣旨、調査および公表の方法は書面で明示し、筆頭著者がより詳細な説明を口頭にて補足した。

なお、同センターは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由をもつ人々が、生活訓練および職業訓練を行う国立の入所施設である。平成10年度に行われた修了生の追跡調査によると、修了者の72%が現在も就労を続けており[6]、いわゆる社会復帰を達成できている人々が多数である。

データは半構造化面接により収集した。全ての面接は筆頭著者が行い、主たる質問項目は、1) 現在の障害のおおまかな状態とそれまでの経過、2) 普段の生活の様子とそれに対する評価、3) 日常的な外出、就労を含めた社会や健常者との接点それに対する評価、4) 社会や健常者との接触で困ること、不愉快に感じた反応、5) 社会や健常者との接触で困ること、有り難かった・うれしかったと感じる反応、である。面接は、極力話し手の自発的な発話に従う方針で行い、関連する話題が自由に展開できるように配慮した。そのために必要と考えられた場合には、面接者の介助者としての経験および健常者としての個人の経験を話し、それに対する評価や感想を求めるとりも含まれた。なお聴覚障害者への面接には手話通訳者が同席した。

全ての面接はICレコーダーで録音し、逐語トランスクリプトを作成した。分析にあたり、まずトランスクリプトから面接で上がったトピックを網羅するケースレコードを作成し、ケースレコードにまとめられたトピックをKJ法により整理した。この手続きにおいて、収集したデータには本調査の主題である社会からの

「まなざし」をどのように感じているのかについてのトピックが十分に拾われていること、この「まなざし」は、注がれる場面によって異なった形で受け止められていることが明らかになった。よって、その後、Lofland, J.とLofland, L.[7]の方法にならい、「まなざし」が注がれる場面ごとに「まなざし」の内容およびその文脈の整理を行った。

3. 結果

3. 1. 社会から感じる「まなざし」

社会からの「まなざし」は、(1) 自立への意欲がありながら機会が開かれないこと、(2) 自分が所属する集団との関係、(3) 公共の場所での不自由および不快体験を通じて語られた。以下、順にインフォーマントの語りを交えて話す。インフォーマントの発言は、縮小文字で示し、インタビュアーの発言は〈 〉、前後の文脈から判断して補足した語は()で示した。

【 】内は発言者の障害と性別、年齢である。

3. 1. 1. 自立への意欲がありながら機会が開かれないこと

(1) 自立への意欲

全てのインフォーマントが就労を強く希望していること、訓練の終了後に就労できるかどうかが大きな関心であると語った。そして、その就労の希望は、生活費を得るといふ以上の意味を持って受け止められていた。

〈Q：障害が非常に重度であっても働く意義はあると思いますか?〉意義があると思います。この前テレビでも言っていたんですよ、日本の障害者は老後にお金はほしいけど、今はお金(税金)を払いたい、と、言っていましたね。本人は働く意志があっても、働く設備がない、と。うん。 【肢体不自由, 男性, 20代】

同時に、この就労への希望の根拠とも言うべき“自立心”が語られ、日常生活において他者への依存を最小限に留めることが挙げられた。事故により頸髄損傷をもった男性は次のように語った。

俺はもう、こうなっちゃった(障害をもった)から、自分で何でもやるっていう気持ちがあるから。人に手を借りるのはいや、人から手を借りるっていうのは、自分の中で許せない範囲。 【肢体不自由, 男性, 20代】

(2) 環境さえ整えば本人の能力次第

また、就労を可能にする環境として必要なのは、特別な保護ではなく、対等に競争できる条件であり、そ

れが整えられれば「あとは本人次第」である、とする考え方が複数の人から示された。

やろうと思えば、普通の仕事でもなんでも、できると思うんですけど。別に障害をもっているから、これはできない、っていうことはないような気がするんです。あとは本人次第じゃないですかね。

【視覚障害, 女性, 30代】

歴然たるハンディはだめですよ。そりゃ、移動するのに車椅子の方が時間がかかるに決まっているし、階段があったら、昇れないのは当たり前なんだから。そういうことじゃなくてね、例えば、三療であっても同じですよ、目が不自由であっても、目が開いている人でも、お客さんが、あんまをしてもらったとか、鍼打ってもらった、どっちがよかったか、っていうことで、お客さんは、次(回も)、その人を選択するんであって、障害者だから、この人が嫌だっていうことではないわけです。その人にやってもらったら気持ちよかった、また来ようかな、っていったらば、そこでは目がいいとか、目が悪いっていうことは関係ないわけです。

【視覚障害, 男性, 50代】

(3) 本人の“能力”ではなく“障害”のみが判断される環境

しかし、実際には「能力」による評価を可能にするような環境が整っていないことが改めて指摘された。中でもより重度の障害をもつ人は切実な問題であると指摘する。

(雇用の)障害者枠、って、障害者って一括りにされちゃうから、一番(先に就職できるのは)はやっぱ聴覚とか、肢体でも立位の人。で、その後、重度でも手が使えるCPの方とか、脊損の方とか。その後に自分たち(頸髄損傷の人)が残るから。重度の人が一番残されて、ほんとうは働きたくても、頭良くても、働けない、っていうのが。 【肢体不自由, 男性, 20代】

同様に、かつて民間企業で働いていた肢体不自由の女性も、より重度の障害をもつ場合にはそれが不可能だと話した。

〈Q：もっと障害が重い場合、同じように就労することは可能なんでしょうか。〉難しい。(もし、自分がより重度の障害だった場合には)多分ねえ、会社では働こうと思わないんじゃないかな。会社がどういうところか、ってよく解っているから、そんなレベルじゃ働けないと思う。 【肢体不自由, 女性, 40代】

(4) 無理をしてしまう環境

同センターに入所する以前に障害をもって就労した経験のある人は全員が、一度職を得ても、障害を抱えて就労を続けることの厳しさも強く意識していた。その厳しさとは、健常者に混って就労する場合に、障害を理由に仕事ぶりが健常者より劣ることを避けようとするあまり無理をしてしまうことだという。つまり、障害に由来する負担の大きさ、体力面での問題を十分に自覚し、それを周囲にも理解してもらうことができないことが挙げられた。当センターに入所する以前に一般就労をしていた男性は、難しさを次のように語った。

障害者と健常者の境目をなくして働いていたんですよ。だから、自分が言わない限り、境目がわからない。で、自分も境目がわからないから、張り切ってやっちゃって、ダウンする、その繰り返しが一番辛かったですね。

【肢体不自由, 男性, 20代】

3. 1. 2. 所属集団からの排除・低評価

(1) 明らかな嫌がらせ

幼い頃から障害をもっており、同センターに入所する以前から障害をもちながら社会との接触を持ってきた人は、具体的に差別や排除をされた経験があった。子どもの頃から障害をもち、普通学校に通った脳性麻痺の3名は、いずれも障害を理由として明らかな嫌がらせ、いじめを受けた経験を語った。

＜Q：障害があることで、今まで、我慢してきたことはありますか。＞我慢したこと？うん、あるよ。やっぱりできないことは我慢するしかないよねえ。何か悪口言われたってね、運動会とかね、体育とかね。「こいつがいるせいで負けたんだ」、とかね。だって、取れないじゃん、バレーボールとか。都合良く来てくれりゃ取れるけど。人によっては、私がグループにいるのが嫌、っていうヤツもいるし。

【肢体不自由, 女性, 40代】

脳性麻痺の男性は、かつての職場でいじめにあったエピソードを語り、障害をもつ人の多くが体験することであろうと答えた。

やっぱ、同僚の中で、たまにありましたね。そういう人は、いじめようとつっこんでくる。例えば、タイピングするにしても自分は早く打ち込んで、早く終わらせようとしているんだけど、上からせかして、より、遅くするとか。＜Q：そういう経験を障害をもつ人が皆されているのでしょうか。＞うーん、職場に入ると、やっぱ、すると思いますよ。

【肢体不自由, 男性, 20代】

また、言語障害がある場合に、話をきちんと最後まで聞こうとしない対応を受けることの不快感も挙げられた。

自分が言いたいことを言おうとしているのに、なんか、自分だけで、はいはい、って、まだ解っていないのに、解っているようなふりをする、ような。

【肢体不自由, 男性, 20代】

(2) 障害に対する無理解による低評価

青年期以降に障害を負った人は、障害を理由としたあからさまないじめや嫌がらせの経験を話した人はいなかったが、周囲の人々の障害への無理解による不快な経験は挙げられた。進行性の疾病による視野狭窄をもつ女性は、視野に入らないために気付かないことが理解されず、「ぼーっとした人」との評価を受けたエピソードを話した。

やっぱり、今見ても、多分、(外見は)普通の方と変わりないと思われると思うんですけど。やっぱり手を出されたり、物を出されたときに、気が付かなかったりすることがあって、それが病気だってわかればいいんですけど、ただぼーっとしていると思われちゃうのが、それがすごく嫌で。

【視覚障害, 女性, 30代】

3. 1. 3. 公共の場所での排除・蔑視

不特定多数の人が出入りし、使用する場所における否定的な「まなざし」は1) 物理的な障壁、2) 人々の明示的な態度、3) 有形無形になんとなく漂う価値観、の3点において指摘された。

(1) 物理的な障壁

1) 設備の不足

しばしば「バリアフリー」を巡る課題として指摘される物理的な障壁としては、車椅子の利用者を中心として、肢体不自由者からはエレベータがないこと、歩道が完備されていない場所が多く危険を感じることに、視覚障害者からは点字ブロックがない場所が多いこと、境目のはっきりしない階段はわかりにくくて危険であること、聴覚障害者からは、テレビ等の字幕表記が少ないことなどが挙げられた。ただ、これら現存するハードの問題を、改修によって全てを解決することは難しいと考えられており、「お金もかかるだろうし」「やってくれたらうれしいですよ」といった控えめな発言が目立った。

2) 設備をつくる人・設備を管理する人・一般市民の意識の欠落

しかし、「そもそも新しい物を作るときに、障害

者の利用を考えることが作る側の発想に欠如している」との指摘には、強い口調で語られる場合が見られた。

今はデザイン重視になっているから、デザインの後に、そういう機能的なことをあとから取り入れるような形だから。最初からバリアフリーの形にしとけばいいと思うんですけど。今は、バリアあって、あとからフリーにしちゃうから。そういうところまで考えてないから。

【肢体不自由, 男性, 20代】

また、「バリアフリー」となるはずの設備が使えない状態であることについて指摘する際には憤りをあらわにして語られる場合もあった。自身は立位の肢体不自由である女性が車椅子利用者たちと出かけようとした先を下見に行った時のエピソードを挙げ、次のように語った。

車椅子用トイレ、探すのが大変で、(あっても)汚かったりとか、実際使えなかったり。実際に、〇〇庭園、行ったんですよ、(車椅子でも)行けるかどうか、偵察に。で、車椅子トイレがあるって言われて、見せてもらったんですけど、そこにはなんと段ボールが山積みで、ビールとかもあって、職員の靴が、トイレの周りにずーっと並んで、全然すぐ使える状態じゃなくて。もし(車椅子利用者として)来た場合には、事前に連絡するんで、これぜーんぶ、片づけてください、って言ったなら、すごい嫌な顔されました。それが現実です。

【肢体不自由, 女性, 40代】

視覚障害者、肢体不自由者の全員が指摘した点字ブロックの上の自転車や違法駐車、歩きながらの喫煙等については、危険を感じていること、また強い不快感を示しながらも「悪意があるというより、気付いていないのではないか」「ここには障害者が来ないと思っているんですよ」という解釈がなされていた。

(点字ブロックの上に)そこに置いても、ここは通らないだろう、って、そういう考えの人が多いいと思います。俺も、(障害をもつまでは)そう思っていました。だからといって、わざわざ置いていたわけじゃないんですけど。多分、そう考えている人がいっぱいいるな、とは、そう思っています。(障害者用駐車スペースについても)車椅子マークがでっかく書いてあるから、絶対分かると思うんですけど、多分来ないな、俺が停めている間は来ないな、って思っているんじゃないかと思うんですけど。

【肢体不自由, 男性, 20代】

3) 背景にある消極的な障害者像

また、別の車椅子利用者は、「来ないだろう」と漠然と考える背景に、「車椅子を使うような人が活動的であるとは考えていない」という、市民が持つステレオタイプがあることを指摘した。

(国リハのような)こういう施設の職員とかだったら、解ると思うんですけど、民間のやっぱ、サラリーマンの人とかって、会社にそんなに何人も障害をもっている人がいるわけじゃないし。車椅子乗っている人が、車に乗るのとか、考えられないんじゃないですかね。

【肢体不自由, 男性, 20代】

(2) 人々の明示的な態度: 「迷惑」「邪魔者」

インフォーマントが「顧客」として駅やお店を利用する際、店員や駅員などから「邪魔者扱い」するような態度で接されていることは、多くの人によって指摘された。

レストランとか、居酒屋とかで、聾者だけでお金を払うときに、例えば、計算が合わないようなとき、ここが違うとか、言いますよね。みんな手話を使っているから、お店の人たちは(自分たちが聞こえないことは)わかっているはず。それでも、ちゃんと書かないとか、早くペラペラしゃべるとか。まあ、それだけじゃなくても、トラブルがあったとき、きちんと対応しない。

【聴覚障害 女性, 20代】

(車いすの乗客への対応を) 駅員さんでも嫌がる人は嫌がるよ。見ていても、もうイヤイヤ、お前なんか来るなよ、みたいな。

【肢体不自由, 女性, 40代】

また、見知らぬ人からあからさまな悪口をあげられるエピソードをも語られた。

(道を)子どもと親が歩いてきて、その前を僕も歩いてたんだけど、その子どもが自分をじっと見ていて、その親が、「あなたも悪いことすると、僕みたいになるよ」って。あれはちょっとショックと言えばショックでしたね。

【肢体不自由 男性, 20代】

(3) 何となく感じ取られる「排除」と「見下し」

上記のように明かな問題事例としては指摘しにくいことが、排除や見下しを受けていると日々感じ取られていることも語られた。

自身は積極的に出かけてることが多いという肢体不自由者の女性も、面接者が「手伝うことをいとわない人も多いのではないか」、と水を向けると、

ボランティアとかされて、そういう気持の人はそうか

もしれないけど、うん。逆に、そう思う人が少ないのよ。そんなだったら障害者なんか出歩くなよ、ってなっちゃうから。〈Q:そういう視線を感じることはありますか?〉そういう傾向ってあるんじゃないかなあ。

【肢体不自由, 女性, 40代】

と語る。

また、悪意のない行為の中に、健常者側のわざとらしさ、押しつけがましさが見られることもあり、その時に不快感を感じることも指摘された。

愛は地球を救う、日本テレビの24時間テレビ。大嫌いですよ。いつも日頃していない人が、席をどけてくれたり、しらじらしい、親切。あのときだけ。ほっといってくれ、みたいな。特にあの近辺はあのテレビの影響で。だいたい効力は3日から、1週間だね。(荷物を持ってくれようとする親切にも) なんか、あるんだよね、フィーリングみたいなのが。いかにもさあ、テレビの影響で、私は持ってあげます、持ってやってんだ、みたいな。

肢体不自由の男性は、車椅子の友人から聞いたという話として、「頑張って」と声をかけられたことについて、相手が優越感をもってしていると感じる、と話した。

電動車椅子の男の子から、誰彼のおばちゃんから、頑張って、って言われたって、いう話聞きました。それは、やっぱ、俗に、障害者を分かっていないというか。うーん、どういえばいいんでしょうか、何というか、こういう言い方違うかもしれないんだけど、優越感を持たれているようで、なんか、あんまり言うて欲しくないですね。

【肢体不自由, 男性, 20代】

3. 2. 社会からの「まなざし」への反応

3. 2. 1. 「排除されている」感覚の形成と理解しあう機会の希求

3. 1. で挙げられた様々な局面において注がれる「まなざし」は、具体的な「差別」や「バリア」とは表現しがたい、総体として、社会から疎外されている、隔絶されている感覚を持っていることが語られた。

肢体不自由の男性は、社会の反応やサービスについてどう思うか、との問いに対して、“自然に世の中に入っていけるような雰囲気”を望むと話した。

一般論になるけど、もう少し、障害者、健常者っていうふうに分けるんじゃなくて、もうちょっと、なんていうか、もっと自然に世の中に入っていけるようなそういう雰囲気というか、まあ、具体的じゃないですけど、そういうふうになればいいのかな、と。

【肢体不自由, 男性, 20代】

聴覚障害をもつ男性は、現在おかれている状況を“水の中にずーっと入っているような状態だ”と表現し、次のように語った。

水の中に、ずーっと入っているような状態と同じだと思うのです。だから、社会が狭くなるようなことも(しばしば)あって。でも、私はそうならないように、一生懸命興味を持つように努力していますけど、疲れますよね。

【聴覚障害, 男性, 20代】

そして、12人のインフォーマント全員が、幼い時期からの障害者－健常者の触れあいによって理解を深めることを求める、と話した。

同じ敷地の中に普通の高校生と、障害をもった高校生がいるのがいいと思うんですよ。普通に一つの正門から入って、中で分かればいい、っていうだけなんで。

【肢体不自由, 男性, 20代】

同様の意図で、当センターの文化祭のようなイベントに来てもらう、特に幼稚園では障害児と健常児と一緒に教育することを推進する、なども挙げられた。

3. 2. 2. 社会参加の抑制

本調査のインフォーマントたちは、自分は外出を楽しんでいる、と自己評価していたが、友人・知人の中には1. で挙げたような社会からの「まなざし」が家に閉じこもる原因となっている例があると指摘した。

私の知り合いでも、何で出歩かないか、っていうと、車椅子に乗り始めの時にJRかなんかで、糞味噌に言われたって言ってた。それがね、歩けもしないのに出歩くなみたいな、糞味噌に、厄介者みたいなこと言われたって。だから、最初にそういう(理解のある)人たちに会ったら、こうやったら出歩けるんだ、って思っで、出歩けるようになったかもしれないけど。

【肢体不自由 女性, 40代】

20代の男性も類似した例を挙げた。

(社会のネガティブな反応を経験することで) 行きたいところがあっても行けなくなっちゃうとか。で、結局、家に閉じこもりがちになっちゃうから。社会がやっぱり、どうぞ、みたいな感じで迎え入れてくれれば、けっこう出やすいと思うんですけど。

【肢体不自由, 男性, 20代】

3. 2. 3. 状況改善への意欲と障害をもつことの肯定的な意味

3. 2. 2. で挙げられたように、社会からの「まなざし」が障害者の意欲を削ぎ、家に閉じこもる誘因になることを指摘したが、インフォーマント自身、特に若いインフォーマントは、人々の理解を広げるために、自分が努力したいと語った。

(周囲の人に対して) ほんとはこうなんだよ、こうしてほしいんだ、ってなるべく言うようにしようと思っ
ていて。そうすると、多分向こうも、こういう人もい
るのかな、と(解ってくれると思う)。地元でも、(リ
ハビリを終えて) 自分みたいに動けるようになったら、
どんどん出て行って、自分みたいな体の人のことを知
らせるようにしなきゃいけないのかな、って。

【肢体不自由 男性, 20代】

〇〇病院では高校生が、一日一人の(施設に入所して
いる) 障害をもっている方と一緒にどっか一緒に行く
実習みたいなのをやっている高校もあって、そういう
の、増やせばいいかな、って思いますけど。学校で教
えただけだったら、実際に解らないし。自分たちも、
高校とか、中学とか、に行って、自分の体験した話と
かすればいいと思うんで、地元帰れば、そういうの、
やりたいと思っているんですよ。

【肢体不自由 男性, 20代】

民間企業で健常者として30年間働いていたという男
性は、障害をもつ経験をしたことで“大人になった”
と語る。ここには、障害をもつ経験の中に積極的な意
味を見いだしていることが見て取れる。

現実には、自分がやっぱり障害者になったから、車椅
子の人に対する見方も俺なんかものすごく変わったよ、
それと人間が優しくなったし、丸くなったし、大人に
なったと思う。

【視覚障害 男性 50代】

4. 考察

4. 1. 社会からの「まなざし」に通底する否定的な「障害者役割」への反発

インフォーマントたちは、結果3. 1. に示したよう
に、「自立への意欲がありながら機会が開かれないこ
と」「所属集団からの排除・蔑視」「公共の場所での排
除・蔑視」を通じて、社会からの「まなざし」を感じ
取っていた。そして、これらの各局面の中には、いず
れも、障害者雇用の問題、障害者への差別的態度、公
共施設のバリアフリーといった政策的に取り組みれて
きた明白な課題とともに、一つ一つを「差別」として

問題化できないぐらい日常的なこと、社会の空気の一
つのようなものの積み重ねによって生じている課題が多
く含まれていた。そしてその“些細なこと”を生み出す背
景には「活動的でない・依存的な障害者像」が当ては
められていると感じられており、インフォーマントた
ちはそれに反発を感じていることが明らかになった。

こうした障害者に対する社会の「まなざし」は、欧
米の先行研究での指摘と共通するものであると考えら
れる。すなわち、“障害者は健常者からの恐怖、心配、
敵意、不信、憐れみ、過保護、愛玩的な反応の
受け手になる[8]”という指摘は、本研究で挙げられた
経験と重なる。また「活動的でない・依存的な障害者
像」は、欧米の先行研究の中で指摘されてきた「社会
的役割としての障害 (Disability as a Social Role)」、
すなわち“受動的、依存的で、子どものような存在[9]”、
“周囲の人の同情や賞賛、不要な援助に対して感情を
コントロールすべき存在[10]” “親役割を果たせない
存在[11]”と同じ意味をもつものであると考えられ
る。

4. 2. 否定的な「まなざし」の影響を受けながらも主体的に改善を志向するインフォーマント

本調査のインフォーマントたちは、社会から障害を
もつ人々に対して、社会は陰に陽に排除する力を加え
ていると日々感じ取られており、その状況の改善のた
めに自然な交流を通じた理解を求め、その改善を願っ
ていた。また、友人・知人の中にはその「まなざし」
によって家に閉じこもってしまう人もいるとして、こ
の「まなざし」は社会参加を阻む要因となりうるこ
とを指摘した。これは、社会からの疎外が当事者にと
っても苦痛や不愉快をもたらすものであることが改めて
確認するものであると考えられる。

しかし、彼らはネガティブな価値観を受け入れるだ
けの存在ではなく、改善のための主体的な活動をする
意欲を維持し、障害をもつて生きる経験の中に成長を
見いだしたりする人々であった。欧米においては重度
の障害者であっても主観的なQOLは低くないとする実
証研究[12]など、障害をもつ経験の中にも肯定的な意
味を見いだしている人が少なくないことが指摘され始
めた。我が国では同様の研究はほとんど見あたらない
が、障害者の経験を理解する上で、欠かせない観点で
あると考えられる。また、これは前節で述べた否定的
な障害者像にのみ囚われた「まなざし」を改変するた
めにも、不可欠な要素と言えるだろう。

4. 3. 本研究の示唆と限界

本研究は、研究者の意図によって社会の課題を設定することを避け、当事者の視点から社会の課題を明らかにしたところに特色がある。得られた結果は、社会の「まなざし」は、障害のある人々の生活を圧迫する可能性が高く、その「まなざし」の内実を明らかにする必要があること、その際に「差別」としては捉えにくい社会の雰囲気をも合わせて捉える必要があること、一方でそれらの「まなざし」にも関わらず積極的な意味を見いだしている人々の存在を示すことも重要であることを示唆している。

本研究のインフォーマントは、12人と限られており、今回の結果は“日本の障害者一般”として捉えるべきものではない。問題解決的、具体的なインプリケーションを導くためには、量的な研究も含め本研究をふまえたより広範囲の調査研究が必要である。そして、最終的には「まなざし」を注ぐ側である市民が実際どのような「まなざし」を持っているのかについての把握と、障害当事者にとって好ましく感じられる「まなざし」を持つための要件をさぐる必要があると考えられた。

面接に応じてくださった12名の国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所入所生の方々、仲介の労をとって下さった同センター指導課の方々に心より御礼申し上げます。

5. 文献

- 1) Murphy, R. F.: *The Body Silent*. Norton Paperback (1990).
- 2) 尾中文哉: 施設の外で生きる－福祉空間からの脱出－。生の技法 (安積, 岡原, 尾中, 立岩著) 増補改訂版, 101-120, 藤原書店, 東京 (1995)
- 3) Gill, C. J.: *Divided Understanding: The Social Experience of Disability*. *Handbook of Disability Studies*. (Edited by Albrecht, G., Seelman, K. D., and Bury, M.), 351-372, Sage Publication, Thousand Oaks (2000).
- 4) Link, B. G., and Phelan, J. C. *Conceptualizing Stigma*. *Annual Review of Sociology*. 27, 63-85 (2001).
- 5) Fine, M. and Asch, A.: *Disability beyond Stigma: Social Interactions, Discrimination, and Activism*. *Journal of Social Issues*. 44, 3-21 (1988).
- 6) 国立身体障害者リハビリテーションセンター, 国立職業リハビリテーションセンター: 修了者実態調

査結果報告書－創立20周年記念事業－。(2000).

- 7) Lofland, J. and Lofland, L.: *Analyzing Social Settings : A Guide to Qualitative Observation and Analysis*. 3rd. Edition, Wadsworth Publishing Company (1995). 進藤雄三、宝月誠訳: 社会状況の分析, 恒星社厚生閣 (1997).
- 8) Barton, L.: *Sociology and Disability: Some Emerging Issues*. *Disability & Society: Emerging Issues and Insights*. (Edited by Barton, L.), 3-17, Longman Sociology Series (1996).
- 9) Albrecht, G. L.: *The Disability Business: Rehabilitation in America*. Sage Publications, Newbury Park (1992).
- 10) Cahill, S. E., and Eggleston, R.: *Managing emotion in public: The case of wheelchair users*. *Social psychology quarterly*. 57, 300-312 (1994).
- 11) Waxman, B. F. *Up Against Eugenics: Disabled Women's Challenge to Receive Reproductive Services*. *Sexuality and Disability*, 12, 155-171. (1994).
- 12) Alblecht, G. L., and Devlieger, P. J.: *The Disability Paradox: High Quality of Life against All Odds*. *Social Science and Medicine*, 48, 977-988 (1999).